九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

松井康浩編『グローバル秩序という視点 : 規範・歴史・地域』

森, 敦嗣
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/22989

出版情報：政治研究. 58, pp.177-179, 2011-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

紹介

松井康浩編

『グローバル秩序という視点―規範・歴史・地域―』

（法律文化社、二〇一〇年、二八三頁）

本書は、近年しだいに使われ始めている「グローバル秩序」(global order)なるものについて、多角的なアプローチから検討を試みたものである。**序章「グローバル秩序論の諸相」(松井康浩)**において、本書のキーコンセプトである「グローバル秩序」について、帝国論からグローバル国家論に至るまでの、多岐にわたる議論の主に理論的な整理がなされた後で、本書は大きく四つのセクションから構成されている。

第Ⅰ部では、「グローバル秩序への規範的アプローチ」を試みている。**第一章「規範的国際政治理論におけるグローバル秩序構想」(白川俊介)**では、「コスモポリタン―コミュニタリアン」論争を手がかりに両者の結節点を探り、普遍的なものを擁護しつつ、同時に個別的なものを尊重しうる、グローバル秩序の構想へのアプローチが提示される。**第二章「グローバル社会における国連の秩序構築」(千知岩正継)**では、国連安全保障理事会が国際的権威からグローバルな権威へ事実上の変容を遂げていることを明らかにしながらも、その正当性には課題を抱えていると論じる。**第三章「グローバル秩序の挑戦／グローバル秩序への挑戦」(大庭弘継)**では、コンゴ民主共和国を事例に、グローバル秩序特有の挑戦である人道的介入をとりあげ、強制力を行使したローカル秩序構築が、グローバル秩序の更なる変容をもたらす軋みや揺らぎとなる恐れがあると指摘する。**第四章「スティムソンのモラリティとアメリカの戦後国際秩序構想」(佐藤秀信)**では、米国陸軍長官ヘンリー・スティムソンのモラリティが、米国の戦後国際秩序構想の具体化に果たした役割の検証と、対日戦犯裁判として山下泰文裁判で示された「正義」の影響を明らかにする。

第Ⅱ部は、本書の副題の「歴史」にあたるセクションである。**第五章「一九四〇年代における米国の太平洋戦略と『グローバル秩序』」(池上大祐)**では、「南太平洋委員会」をグローバル秩序の視点で再検討し、それが米国のグローバルな基地戦略の文脈に位置づけ、その歴史的意味を検討している。**第六章「『招かれた「帝国」』の冷戦プロパガンダ」(川上耕平)**は、米国の反共プロパガンダ活動の事例として一九四八年に米国国内で行われた「イタリアへの手紙」キャンペーンをとりあげ、プロパガンダの特殊アメリカ的な特徴の一端を明らかにするものである。**第七章「ヘゲモニー国家の帝国への志**

向とその挫折」（**筧雅貴**）では、一九六一年の米国・ベトナム共和国の関係をとりあげ、ヘゲモニー国家である米国が帝国的支配を目指しながらも、それが挫折に終わったことを論証する。**第八章「アメリカ『帝国』形成史からみる移民問題」**（**北美幸**）は、移民が一九世紀以降のアメリカ「帝国」形成史の文脈に位置づけられることを再確認し、排外的愛国主義に傾倒する現代の米国のグローバル社会におけるあり方を問うものである。

本書の副題「地域」にあたる第Ⅲ部は、多民族からなる過去の帝国と現在の地域主義による秩序形成をテーマとするセクションである。**第九章「帝国の子ども、国民の子ども」**（**江口布由子**）は、一九世紀末のオーストリアを舞台に、社会政策の核となる婚外子に対する福祉を試金石に、オーストリアにおける帝国と国民統合の様相を明らかにする。**第十章「東アジアにおけるグローバル化と地域統合」**（**鄭敬娥**）では、リージョナリズムに注目し、東アジア地域統合の背景と地域統合の実践を分析することで、東アジア協力の動きについて、グローバル化を地域レベルで管理し調整する、リージョナル・ガヴァナンスの一環として理解する。**第十一章「台頭する中国と東アジア秩序」**（**徐涛**）では、中国における戦略的東アジア共同体論に焦点をあて、それを論ずる中国の学者たちの議論を整理し、複数の地域枠組みと参加国の戦略的思惑を包容しつつ凝集性を高めつつある東アジアが、中国の戦略拠点となり、グローバル秩序の形成に影響を与えていくと分析する。**第十二章「ユーロ・グローバリズムと非承認国家問題」**（**佐藤圭史**）は、ソ連邦崩壊後に発生した非承認国家問題をめぐるＯＳＣＥ（欧州安全保障・協力機構）の和平交渉プロセスを検討し、その活動が西欧基準の移植を試みるユーロ・グローバリズムであり限界があることを論ずる。

第Ⅳ部では、ローカルやトランスナショナルな市民社会からグローバル秩序へのオルタナティヴが検討される。**第十三章「グローバルな権力ネットワークと市民社会」**（**藤井大輔**）は、水道事業の民営化を推進する企業や世界銀行など、グローバルな権力ネットワークの形成を明らかにし、それを批判する市民・ＮＧＯの活動のネットワークにおける位置づけを考察する。**第十四章「歴史的記憶をめぐるトランスナショナル市民の萌芽」**（**大和裕美子**）では、朝鮮半島出身者が犠牲となった炭鉱水没事故の記念碑建立をめぐる日本の市民団体の活動と韓国人遺族会との交流を追跡し、トランスナショナルな市民が作り出される背景を論じる。**第十五章「イスラム主義とその限界」**（**佐々木拓雄**）は、グローバリゼーションに抗するイスラム主義をめぐる議論を参照しつつ、インドネシアにお

けるイスラム主義の展開に着目し、その限界と問題点を明らかにする。

政治学の中心的課題の一つである「秩序」について、グローバル化が進展する世界においては、「国際秩序」でも「世界秩序」という言葉を持ってしても捉えきれないものがあろう。「グローバル秩序」という「視点」から多角的にそれを検討しようとする本書の意義は大きいだろう。

（森敦嗣）